

# American Rock Lyric Landscape

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ—

ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジョージ・カックル

イラストレーション=花井祐介

第3回

“非合法”に働く  
メキシコ人を歌った悲哀の一曲

The Byrds  
‘Deportee (Plane Wreck At Los Gatos)’



The Byrds  
“Ballad Of Easy Rider”  
Columbia CS9942 [1969]  
➡ソニー ©MHC P660

アーしている。なかでも一番知られているのはこの『イージー・ライダー』というアルバムに入っていたザ・バーズのヴァージョンだろう。とはいえ、この曲はカヴァーされるたびに少しずつ歌詞が変わっているうえ、オリジナルの歌詞は定かではない。詩を書いたのは、あのボブ・ディランに大きな影響を与えたフォーク・シンガーのウディ・ガスリーで、そもそも歌ではなく、ただのボエムだった。その10年後、マーティン・ホフマンという学校の先生によってメロディーがつけられた。しかし彼は何年か後に自殺してしまったそうだ。しかもそのメロディーがつけられた時は、もうウディ・ガスリーはハンチングトンス・コレラという病気で入院し、すでに歌えなかった、本人のヴァージョンは存在しない。

The crops are all in  
And the peaches are rotting  
The oranges piled up  
In their creosote dumps  
You're flying 'em back  
To the Mexican border  
To spend all their money

サンフランシスコに住んでいた俺は、アメリカで働くメキシコ人を身近で見ていた。農園で働く人、レストランで食器を洗う人、ペンキ屋……。英語はできないが、熱心に仕事をし、気も優しい。しかしどんなに一生懸命でも、やはり報われていないんだ。だからそんな彼らを歌ったこの曲を聴くたびに、俺は切なく、むなししい思いがした。ザ・バーズの 'Deportees (Plane Wreck

To wade back again

この曲は先月号のリトル・フィート「ウイリン」の中でも少し触れた、アメリカの農園で働くメキシコの人々を歌っている。メキシコからアメリカに渡り、新しい生活に夢を求めたり、メキシコに残してきた家族のために働いている人たちだ。

詩には果物はすでに木からもぎ取られ、桃はもう腐っている、そしてオレンジはクレオソート入りのダンプに山積みになっている。値段が下がらないように、果物が大量に出回ることはない。穫れ過ぎたら、捨ててしまう。クレオソートは穫りすぎた果物に撒く毒薬だ。そしてメキシコ人たちはといえば、メキシコの国境まで飛行機で飛ばされている。アメリカで稼いだ金をメキシコで使い果たしたら、もう一度、川を渡ってアメリカに戻るという。

メキシコとアメリカの国境にはリオ・グランデという川が流れていて、橋が架かっている街もあれば、砂漠もある。

Goodbye to my Juan,  
Goodbye Rosalita

Adios mis amigos, Jesus y Maria  
You won't have a name  
When you ride the big airplane  
All they will call you  
Will be "deportees"

このなかでウディはメキシコ人の名前を入れてる。普通の、ありきたりな名前を入れてる。スペイン語でよならとっている。'Adios mis amigos'。そして君たちは大きな飛行機に乗ったら名前がなくなる。ただの 'deportees'。それは強制送還された人のことだ。

実はこの曲のヒントは、ウディ・ガスリーが1948年1月29日の『ニューヨーク・タイムズ』の記事を読んだことにあるという。1940年代、アメリカが戦争をしていた頃は農家の働き手が足りなくて、メキシコ人を連れてきていた。仕事が終わったら、飛行機で返されたんだが、ある日そんな飛行機がカリフォルニアのロス・ガトスという谷で墜落したという記事が掲載されていた。この飛行機に乗っていたメキシコ人はアメリカが手配した人たちだったから、イリーガルではない。でもその新聞

には名前も出ていなくて、ただの強制送還された人と載っていた。亡くなったのは、メキシコ人が28人、アメリカ人は4人。アメリカ人の名前は新聞に載っていたのに、メキシコ人は強制送還された人という言葉でくくられた。これにウディは人種差別を感じたのだろう。ウディは新聞にはなかった名前を詩のなかでつけてあげたんだ。ファン、ロザリタ……とね。

でもウディはちよつと勘違いしたと思う。もぐりでアメリカに入って強制送還される人は、飛行機には乗れなかったから。  
My father's own father,  
He waded that river  
They took all the money  
He made in his life  
My brothers and sisters  
Come working the fruit trees  
And they rode the truck  
Till they took down and died

実はこのヴァースをザ・バーズは入れていない。俺には彼らが曲を短くするために減らしたとは思えないんだけど(笑)。こ



ここではオリジナルを説明しよう。詩には自分の父と祖父も、国境の川を渡って稼いだ金を全部取られてしまったとある。もしかしら、職場では宿泊費も食費も自分で払わなければならないのかもしれない。兄弟もみんな果物の木の下で働いて、死ぬまで自分たちはその農園から住まいを往復するトラックに乗っている。いくら稼いでも、そこから出ることはできないという。

Some of us are illegal  
And others not wanted  
Our work contracts up  
And we have to move on  
600 miles to that Mexican border  
They chase us like outlaws  
Like rustlers, like thieves

このヴァースはザ・バーズも使っている。俺たちの何人かはイリーガルだ。もぐりで働いているメキシコ人のことだ。短期で働く人たちもいる。仕事が終わって契約が切れたら、ほかに働く場所を探さなければならぬ。違う農園に行く人もいれば、メキシコに戻る人もいる。メキシコの国境まで

600マイル。彼らは犯罪者やルスラー(牛や馬を盗む人)、泥棒みたいに、いつも追っかけられているような心境だろう。

We died in your hills,  
We died in your deserts  
We died in your valleys  
And died on your plains  
We died 'neath your trees  
And we died in your bushes  
Both sides of the river  
We died just the same

またもや、同じでザ・バーズは歌詞を抜いている。オリジナルの歌詞はこうだ。山の中でも死んだ、砂漠でも死んだ、谷間でも死んだ、平野でも死んだ。木の下でも、小さい木の下でも死んだ。川の両側でも同じように死んだってね。こういう仕事をするメキシコ人たちの生活は辛いんだ。

The skyplane caught fire  
Over Los Gatos Canyon  
A fireball of lightning  
Shook all our hills

Who are all these friends  
Who are scattered like dry leaves  
The radio said  
They were just "deportees"

空を飛び飛行機はロス・ガトスの谷間の上で燃え上がった。周りの丘を震わせるぐらいの雷の火の玉だった。枯れ葉みたいにばらまかれている友だちは、誰が誰だかわからない。ラジオではただの強制送還された人たちだという。ウディーは実は新聞で読んでいたが、詩ではラジオと言っている。ザ・バーズが歌っている歌詞はこれで終わりだ。でも、オリジナルにはまだある。

Is this the best way  
We can grow our big orchards?  
Is this the best way  
We can grow our good fruit?  
To fall like dry leaves  
To rot on my topsoil  
And be called by no name  
Except "deportees"?

アメリカの大きな農園を育てるのに、こ

のやり方が一番いいのか? アメリカの果物を育てるのに、このやり方が一番いいのか? ただの乾いている枯れ葉みたいに、土の上で腐って、名前もなく、強制送還された人たちと呼ばれて。ここでウディーは捨てられている桃みたいに人を扱っているのかと問いかけている。

今でもメキシコからアメリカに、たくさんの人が働きにくる。時代は変わっても、彼らがいっ捕まって強制送還されるかと恐れているのに変わりはない。

サンフランシスコにもメキシコ人街がある。俺はサーフィンで何回かメキシコに行っているうちにメキシコ音楽を好きになって、音楽が聴ける店を探していた。そんなある日、家の近所のメキシコ街を歩いていたら、ある店からメキシコの音楽が聞こえてきたんだ。看板には(ヘラ・テラザ)とあった。入ってみると、右側には長いカウンター、左側にはテーブル席が10卓ほど。その奥には小さなステージがあった。俺はカウンターに座ってビールを頼んだ。コロナ・プリーズ!。持ってきた店員はひと言も話さなかった。回りを見たらコロナを飲んでるのは俺しかない。ほかの客は

みんなバドワイザー。きつとわざわざアメリカまで来て、コロナを飲む気にはならぬいんだろうね。こっそり彼らの会話を聞くとしたけど、何にもわからなかった。みんなスペイン語を話していたんだ。俺が彼らのほうに向かって立っても、誰も目を合わせてくれなかった。あとから思えば、彼らはきつとイリーガルのメキシコ人だったに違いない。そして、俺はイミグレーションの刑事だと思われたんだろう。飲むふりをして捜査し、イリーガルを逮捕するつもりとか。バーテンダーも俺からは注文をとるだけ。寂しかったよ。

それでも、その店にはなぜか通うようになった。お客はほとんど男で、土曜日には生バンドがムシカ・ノルテニョという国境の音楽を演奏する。そして2年ほど通ったある大晦日に行った時、初めてバーテンダーが声をかけてくれたんだ。メキシコ人が使う独特な握手まで教えてくれた。ニコッと笑って、ウェルカム・アミーゴってね。きつと2年経って、俺が刑事じゃないとわかったんだろう。すごく嬉しくて、その言葉に応えるように、俺はほかの客のようにバドワイザーをオーダーしたんだ。